

旭三寄を記録し残す

会津美里町旭三寄の景観を後世に残すツールデザインの研究

インテリア分野 柴崎ゼミ A2201717 高崎 真衣

研究の背景

旭三寄はいわゆる限界集落と呼ばれる地域であり、年々人口の減少が見受けられる。そのなかで高齢者の数が増加していく傾向にある。それに伴い高齢者が一人暮らしをしている住宅の増加も顕著である。

保科正之により、主に会津から江戸へ運輸する手段として会津、栃木、江戸間に街道を整備。それ以降下野街道または江戸街道の名称で親しまれ、東北～江戸間の移動手段としても活用された。江戸から運輸する際、分岐街道が多数派性し、その一つである金山郷街道は、主に若松、高田、昭和村を通じ日光へと続く街道となっており、また旭三寄を通過していたため、街道を中心に酒造や商店で栄えていた。しかし、街道が廃れていくことで人の通りも減り、現在は利用されず空き家となってしまった商店跡や酒造跡が数多く存在する。

街道を整備する、酒造を繁盛させるなど試みて、会津を通して地域全体を発展させようという動きが明治から昭和にかけて見受けられたが、現在は地域を発展させようという動きがみられず、これから更に人口減少などによって廃れていくことが考えられる。

研究の目的

今回調査をしていくことで、何もなかったと思っていた旭三寄には多くの歴史が残されていることが分かった。誕生し発展してきた経過を地域の特徴や地名の由来、発展した酒造などの商店跡が呈しており、地域の特色などを知ることが、自身の住む地域についての知識をより深めることにつながるということが分かった。

歴史に関係する建造物を実測し、エレベーションを CAD 図面化し、街並み図を作成。地域の特色や歴史的背景を記していくことで記録保存につながるのではないかと考え、また自身の目を通した旭三寄を、街並み図やジオラマ模型などに起こしていくことで、後世に記憶として残していくツールデザインの提案をすることを目的とする。



計画(研究のプロセス)



成果物(完成作品)

街並み図

かつて栄えていた酒造跡を中心に実測調査をし、エレベーション・図面化する。それらに着色や背景の描写を施し、現在の様子などを記録として残す。また、文献調査などで分かった地域の特色や歴史などを記載することで、街並み図をみたときに旭三寄を俯瞰的に見ることができるのではないかと考える。



酒造跡を一部抜粋したエレベーション(着色、背景描写なし)。この酒造は、全体を通して凡そ 100M ほどあるかなり大きな形態をしており、かなり栄えていたことがわかる。上部の酒造跡は、現在は人の出入りがあまり確認できず、閑散としている。



上部のエレベーションは酒造跡前方にある建造物である。このように酒造跡を始点に集落を右回り、左回りでエレベーションを作成。着色、背景の描写は主に illustrator や CLIP STUDIO PAINT を利用。

ジオラマ模型

実測、エレベーションし作成した街並み図を基にジオラマ模型を制作する。今回は、震災時に神戸大学槻橋研究室によって考案された「失われた街」模型復元プロジェクトの手法を旭三寄の記憶保存に応用したものを制作。ジオラマ模型に街並み図のルートに記載することで、街並み図に沿った形で記憶を保存でき、また実際に保存した記憶を街並み図と並行して眺めることができるのではないかと考えた。

また、住民の思い出をジオラマ模型にのせるため、ヒアリング調査を行った。旭三寄の住人にヒアリング調査をしていく中で、「過疎により店がなくなってしまう残念」「バスなどの交通手段もなくなったことで人通りがさらに減り寂しい」など、過疎化に対して寂しさや不便さを嘆く声が多かった。しかし、自然や年間を通して感じることでできる四季が良いと、環境の良さを誇らしく語る住人が多かった。また、かつては道路より農道のほうが多く、当時の子供は農道で遊んだり川で遊んだり、自然に親しむ機会が多かったことが分かった。

考察

今回は、私が現在住んでいる地域の調査を行った。今は廃れてしまい、すっかり寂れてしまったこの地域にもかつては多くの方が物販や、旅の経路や宿泊所としての利用、運輸などで行き交い、栄えていたことが分かった。また、調べていく中で、古くは戦国時代から、歴史の舞台が随所に見受けられることが分かった。しかし、この地域のそういった歴史性や特色、今に至るまでの経緯などを知る住民は年々減少していき、私のような若い世代は、知る機会もあまりないまま育っていくことになるだろう。それは、私が今回調査した旭三寄に限らず、日本全体を通して言えることである。歴史や特色を知ること、自身の住む地域への誇りにもつながり、私が旭三寄に対してずっと抱いていた「何もない」という考えを払拭することにもつながるのだと気づいた。今回の取り組みが、「何もない」は思い違だったと思わせ、かつ旭三寄について知識を深めるきっかけとなったと考える。